

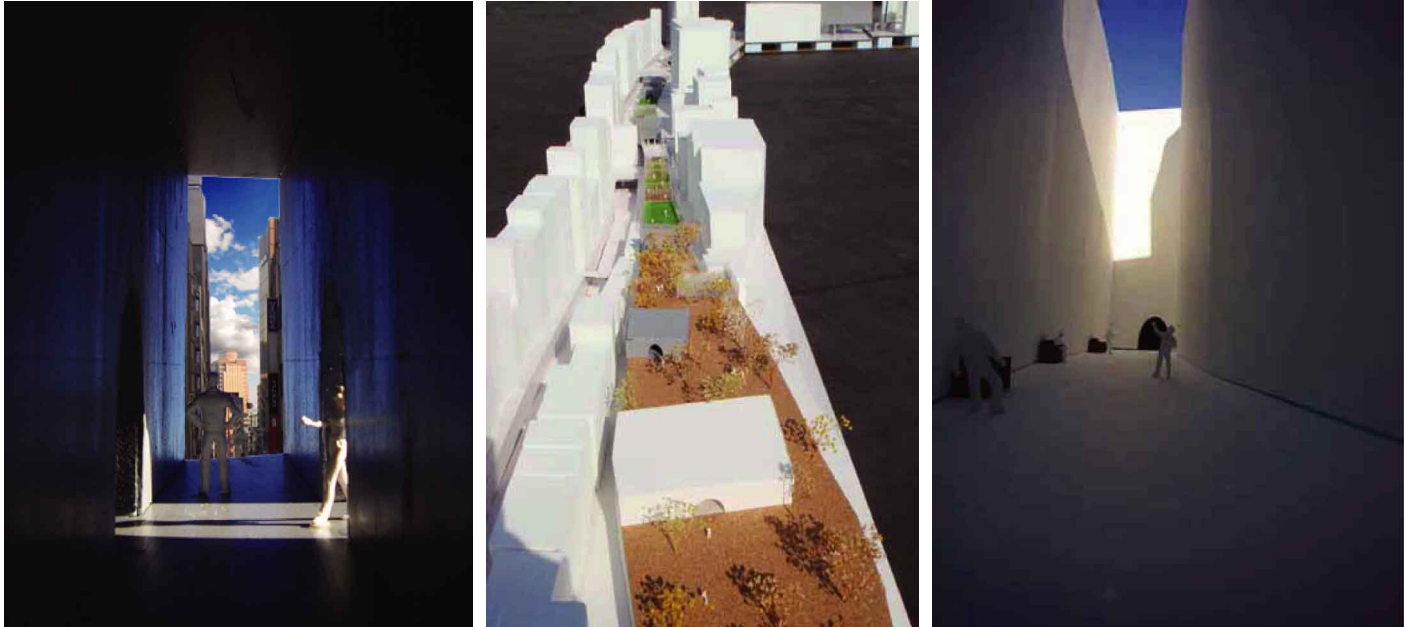
奨励賞



heya(へや)

船瀬 瞳 (ふなせ ひとみ)

東京理科大学 理工学部 建築学科



都市のなかに余白をつくる。都市、特に東京。都市内が、高密度・多様化している中で、人々が自由に自分自身の時間を過ごすことが出来る居場所はほとんど存在していない。また、都市内には、用途が決まりきった場所が多く存在しており、「 をする場所」となっている。
「 をする場所」ではなく、人々がふらっと立ち寄り、自分自身の時間を過ごすことの出来る場所が人々の居場所となりえるのではないかと。敷地は、東急東横線渋谷駅から代官山駅の線路跡地。この場所に、「heya」をつくる。
「heya」は、壁・屋根がなかったりする。また、「部屋」よりももっと曖昧な存在である。「 をするheya」ではなく「 がしたくなるようなheya」である。

【講評】「みち」に「heya」をつくる。この作品は、東急東横線渋谷駅から代官山駅が地下化されることによって生まれる線路後の空地への提案である。渋谷から代官山まで歩いて20分という距離の「みち」の中に、作者いわく「部屋」でもなく「へや」でもない、機能が曖昧な場所である「heya」を配置している。簡単に言ってしまうと道に広場的な要素を付加するということになるのだが、作者の提案では「heya」の連続が「みち」を形成しているという点が重要である。この「heya」には、行為を誘発する(さりげない)仕掛けが設定されており、それによりそれぞれの「heya」の性格がやんわりと浮かび上がってくる。「heya」の機能に影響をもたらす周辺の表情(機能)が平面図に描かれていないのが少し残念ではあるが、時間と共に性格が変化していくこの「heya」という場所の提案は魅力的である。この感性を今後も大切にしてもらいたい。

(審査委員：中野正也)

